

修身小學

初等科之部

卷二

館藏書		265
484		
一	一	一
一	七	九
册	號	架函

吉田利行編輯

版權

所有

修身小學

星文館藏版

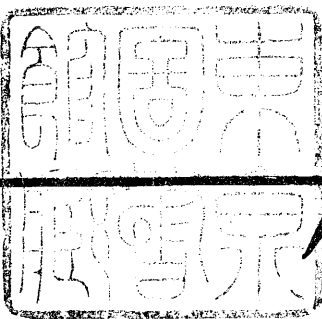
修身小學卷之二

第一章

吉田利行編

○人學ばざれば道を知ら

ず。禮記



修身小學 卷之二 星文館

竹書紀年 卷之六 宣王六年 魯哀公十四年 春西狩 獲麟 作春秋至此而絕筆

○學にあらざれば。以て才を廣むることなし。小學

○志一を立つるは。學問の本なり。大和俗訓

○學んで時にこれを習ふ。

論語

○自ら

つとめ

て息ま

ず。易經



○高きに升る。必ずひくき
よりするが如し。書經

第二章

○凡そ書を讀むよハ。忙は
し早く讀むべからず。童子

訓

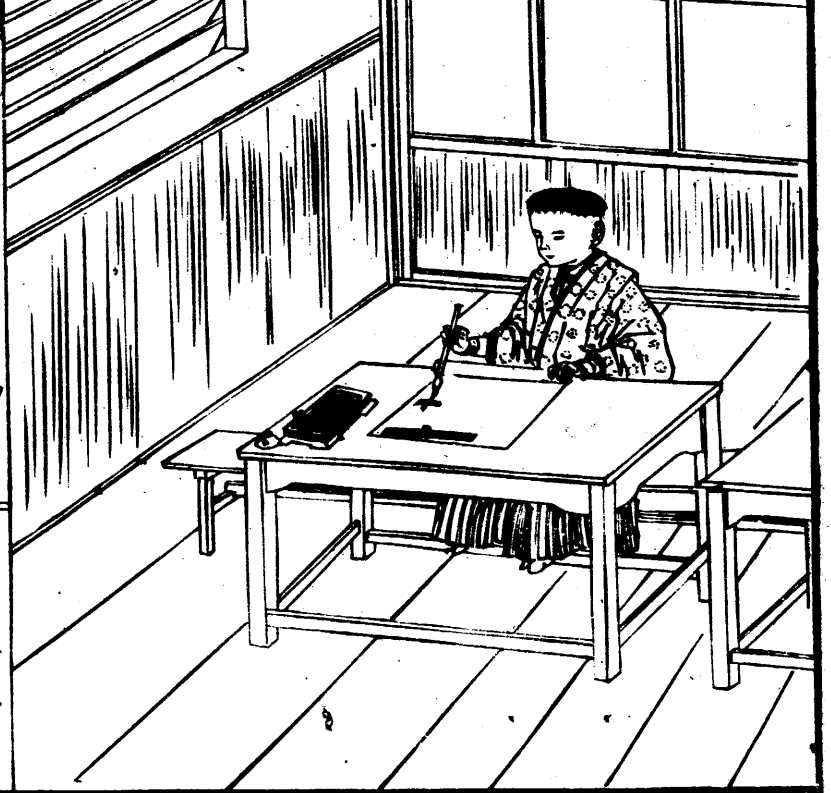
○書を讀み畢らば。もとの
如く。たほひ收むべし。同上

○書を。人の踐む席上に。置
くべからず。同上

○書を
投げ書
の上を。
越ゆべ
から以。



同上
○凡そ
字を書
くに恣
に倅忽



に書く處からず。同上

○凡そ文字を寫すに手を

汚さしむることなかれ。童蒙

須知

○窓壁几案及び文字の間

まハ字を書くべからず。同上

○人の器物を借ること

好む處らひ。大和俗訓

○人の書を借らばそこ

ひ汚すべからず。同上

第三章

○身は親の枝あり。大戴禮

○一たび足を舉ぐるも。

敢て父母を忘れず。小學

○高きに登らず。深きに臨

まず。禮記

○凡そ危険ハ。近づくべ

からず。童蒙須知

○出入起居つゝ。一まざる

ことあるふかれ。書經

○禮法

またが

へる。行

跡ある

べから



ず。大和
小學

○凡そ

子弟は。

早く起

ま。晏く



眠るを要すべし。童蒙須知

○安息を恒とするとな

かれ。詩經

○無益の事は為すべから

ず。童蒙須知

○かけ勝負すべからず。喧

嘩口論を為らば。大和小學

第四章

○欲はほしいまゝにすべ

からず。禮記

○多欲

ふれば。

生をそ

こかふ。

省心録



○酒食

を過ご

すは病

を生ず

るの本



なり。大和俗訓

○怒りをこらへざるは争

ひの本なり。同上

○いかりと慾とハ忍ぶべ

養生訓

○忍ばざればわざはひあ

り。同上

○忍ぶは身の寶なり。同上

第五章

○人の身のわざは言行の

二つあり。初學訓

○行ひ。かからず正直よし。

管子

○言を出だすよし。必ず行
ひをかへりみる。初學

○惡言。口より出ださず。同上

○多言は衆の忌むところ

なり。同上

○人の嫌ふことは言ふべ
からず。童子訓

○事に
とくし
て言に
つ、し
む。論語



○人の
よしあ
し言ふ
べから
ず。大和
小学



第六章

○日々行ふ事ごとに。過ち

なからん事を思ふべし

大和
俗訓

○思案せざるは。過ちの本

なり。同上

○過ちてハ。改むるまは

かることなかれ。論語

○過ちをはちて。非をかす

ことなかれ。書經

○過ちてよく改むるは。善

の大か

るもの

なり。孝
經

○徳は。

善を積



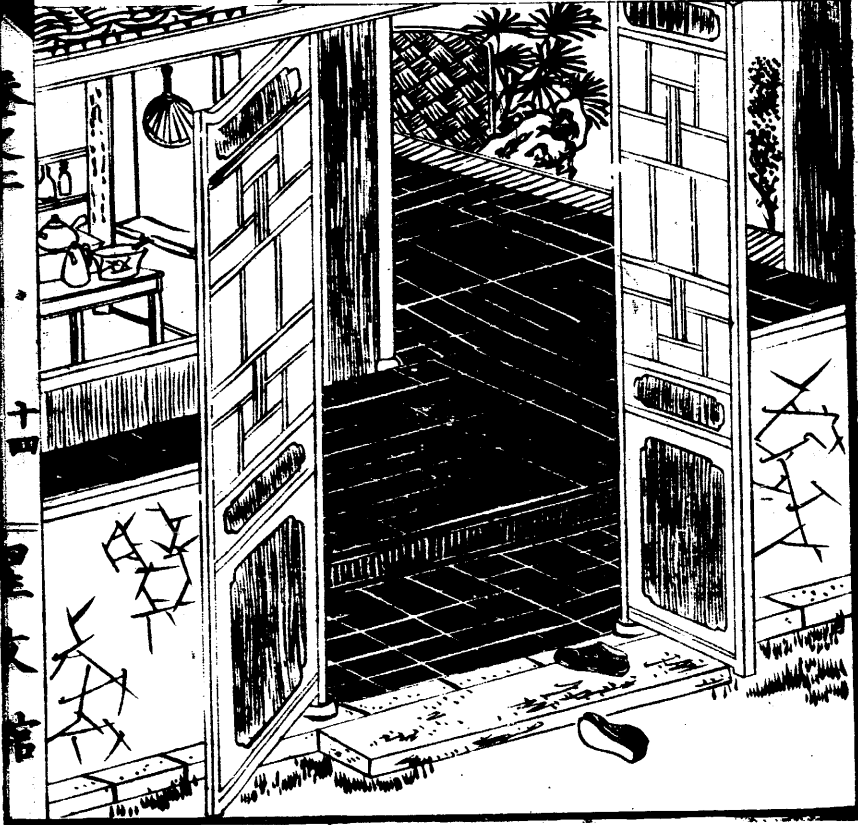
むよあ

り。三
記 畧

○禍は。

うらみ

を積む



よあり。同上

○善も悪も。小を積みて。大に至る。大和俗訓

○悪の小なるを以て。これを爲すことあかれ。小學

○小悪止めざれば。大悪ある。三畧記

○善の小なるを以て。爲ざることあかれ。小學

○善を積むの家よハ。必ず

餘慶あり 易經

修身小學卷之二終

明治十八年七月二十二日版權免許
同 年八月 刻成

福岡縣士族 定價金六錢五厘

編輯人 吉田利行

福岡縣福岡區福岡
西職入町六拾八番地

同

出版人 林 芥 叢

同縣同區同所
箕子町百三拾番地

同

同

同

同

同

同

右田喜九郎

同縣同區博多
掛町十一番地

長濱竹次郎

同縣同區福岡
下名島町五十七番地

高田芳太郎

同縣同區博多
糞屋町十一番地

修身小學

初等科之部

卷三

65

484

館經書會育

一	七	一	九
册	號	架	函